



●続：研究会大会での発表のすすめ

秋の研究会大会の申込締切が9月30日(月)に再延長されました。実行委員会より、現時点にて発表申込数が例年の半数のため、追加募集を行っています。申込締切の再延長に伴い、申込書に学会誌掲載用要旨、および「予稿あり発表」の場合には予稿を添えて申し込むことでエントリーが可能となります。

研究会通信 No.405 で、秋の研究会大会発表による3つのメリットについて書きましたが、もうひとつ加えさせていただきます。

④独自の専門性で「レアキャラ」になる

色彩を仕事にされている方は多いと思います。独自の研究テーマを持ち、秋の研究会大会を起点として、論文ないし論作(色彩教材作品+論文)に繋ぐことにより、「レアキャラ」になって競合者から一歩抜け出すことができると考えます。独自の専門性により、新しい仕事や、知名度向上に繋がる可能性もあります。「いきなり研究と言われても、いきなり論文と言われても」と思われるかもしれませんが、そんな時こそ、色彩教材研究会を利用するのも手と思います。

研究会大会の詳細は、以下のリンクより。
<https://www.color-science.jp/kentai2024/>
(吉澤陽介 主査より：009)

●北海道幹事会1日目・小樽

北海道在住の昆野幹事(小樽案内人1級)のご提案により、北海道での幹事会が8月21~22日に行われました。関東から北畠名誉顧問と幹事2名が参加、昆野幹事の有意義なご案内を受けました。

1日目は小樽。言わずと知れた港街。北前船で富と文化が流入し、江戸時代から昭和初期に潤った地域の名残が随所に見られます。赤い煉瓦造りの洋風建築、運河沿いに並ぶ鳶のからまる三角屋根の倉庫や映る水面、明治時代の最先端技術を駆使した鉄筋コンクリート造の威風堂々たる銀行建築の数々。圧巻だったのは似鳥芸術村。お値段以上の二トリが4つの美術館を設立し、国内外の絵画やステンドグラス、彫刻などを展示しています。企画展では山下清の貼り絵鑑賞。素朴さと想像を絶する繊細さに見入ってしまいました。また北畠顧問の東京芸大時代のご様子も伺え楽しく充実したひとときでした。小樽は文化庁の日本遺産候補地となっていますが、情緒ある街並みに高彩度の看板や広告が目立ち違和感がありました。雪景色ではどう感じるのか冬の小樽も訪れてみたいです。2日目は陣出幹事に続きます。(鈴木章子)

●北海道幹事会2日目・札幌芸術の森

幹事会2日目は真駒内にある「札幌芸術の森」である。真駒内(まこまない)は1972年(昭和46年)札幌オリンピックのメイン会場となり、アイスアリーナ・選手村が今も残されている。ここは、起伏に富んだ緑豊かな自然の中に広がる野外美術館である。敷地面積7.5ヘクタール、日本・ノルウェー・ポルトランド・瀋陽などの64作家74作品の彫刻が展示され、作品の多くは作家がこの地を訪れ、地形や周囲の状況、気候などをもとに新しく制作したものである。

見て触れて四季折々の自然を五感で感じることでできる芸術の森を札幌芸術の森彫刻解説ボランティア昆野幹事の案内で巡った。各彫刻の特徴・意味など説明いただき、夏の緑の森から光・風・水・石・木という自然の声に気づいた一日であった。

彫刻家佐藤忠良氏の作品も多く、優しさあふれる彫刻や「佐藤忠良記念子どもアトリエ」では美術の教科書や絵本の挿絵も描いた佐藤忠良の子どもの造形教育や感性を育むための活動も紹介・展示してあり、ワークショップでは自由にペン画を描く子供たちを見て幼児期からの造形教育の大切さを感じた。

(陣出久美子)